

北方四島交流事業参加教育関係者レポート

No.11 長野県須坂市立墨坂中学校 玉井広観

9月7日土曜日、エトピリカ号で根室を出港し、しばらくすると、国後島の羅臼山がどんどん大きく見えるようになり、「いよいよ国後島に行くんだ」という高揚感が高まってきました。3時間半後、古釜布湾に到着し、湾沿いに予想外に多くの建物群が見えました。第一印象は、「ずいぶん大きな港町だ」という印象でした。上陸しバスで「友好の家」へ行く途中に見える町並みや、「友好の家」から見える港町の風景も、一定規模の新しい建物が多い町でした。ロシアが町の発展に力を入れていることが感じられました。後に歓迎セレモニーで国後島の副地区長の話から国後島の人口は約8,000人で、北方四島の全人口17,000人のうち、最も多いということを知りました。この人数はソビエト連邦（現ロシア連邦）に占拠される前の戦前住んでいた日本人の数とほぼ同じです。「友好の家」は古釜布の中心部の高台にあり、湾の一部が見晴らせる、とても良い場所にあると感じました。以前国後島を訪れた人から「道路は舗装されていない」と聞いていたのですが、古釜布の中心部は舗装されていました。しかし、ホームビジットのホストファミリーの家へ行く途中や、「ろうそく岩」を訪れた時や、古釜布郊外の海沿いの日本人墓地（ロシア人の墓地も同じ場所にある）へ行った時は、途中から土埃のたつ未舗装の道路となりました。中心から外れると、未舗装でした。



海上から見た羅臼山



海上から見た古釜布港

ホームビジットで訪れたオリシェフスカヤさんは、ウラジオストク出身で、国後島出身の夫と結婚して国後島に住むようになったそうです。2人の娘は既に結婚し、ウラジオストクとモスクワ近郊に住んでいるということでした。オリシェフスカヤさんの夫は既に亡くなったのですが、生前国後島で自然保護官をしていて島の各地を歩き回っていたそうです。島は長さが120km、幅は広いところが30km、狭いところが8kmほどで、とても大きな島です。自然はとても豊かで北部には北方領土で最高峰の爺爺岳（ちゃちゃだけ1,872m）があり、北海道と共通の動植物がいると郷土博物館の学芸員の女性が話していました。ロシアは現在国後島の南部と北部を自然公園に指定して人の立ち入りを制限しているそうです。かつて日本人はその北部や南部にも集落を作って住んでいましたが、戦後74年を経て自然に帰っているようです。オリシェフスカヤさんの夫は自然保護区の各地を歩き回り、かつて日本人が住んでいた集落の跡から陶磁器を拾い集め、売って生計の足にしたこともあったと彼女が話していました。家を訪問した時も、陶器がたくさん飾ってあり、私たちに見せてくれました。その中に灰皿があったのですが、灰皿の裏に「國後郡 東沸村 古

谷（鈴木？）」（最後の古谷は読み取りにくく、違う名字かもしれません）」と彫られていました。おそらく持ち主の名前であると思います。北対協の佐藤さんに聞いたところ、かつて国後島は國後郡と呼ばれ島の南部に東沸村という村があったということがわかりました。日本人が住んでいた痕跡が明らかになりました。また、1990年代の初めに日露で協力して火山である爺爺岳の調査が行われ、日本側が調査報告の立派な写真集を発行し、彼女の夫も自然保護官としてそれに参加しており、その写真集を見せてもらいました。多くの爺爺岳の写真の中に、麓の写真もあり、その中に多くの木製の電柱群とそこに張られた電線の写真がありました。そこには「日本人が住んでいた痕跡」と書いてありました。ロシア人は爺爺岳の麓には住んでいないようなので明らかにそこに住む日本人の村に引かれていた電柱でした。40年経ってもそのままの姿で立ち続ける電柱群の姿に、ある種の感動を覚えました。74年経った現在も立ち続けているかどうかはわかりませんが・・・。

滞在2日目に古釜布郊外の海沿いの日本人墓地への墓参をしました。墓石の数は少なかったですが、立派な院号のついた戒名や、陸軍伍長と彫られた墓石がありました。結構豊かな生活をしていた人もいたこと、国後島の住民も出征して戦死した人がいたことが想像できます。終戦後のソ連軍の侵攻で、それらの住民が着の身着のまま脱出したり、強制的に退去させられた事を考えると、住民の理不尽さや、やるせなさ、悲しみはいかばかりだったろうと思います。郷土博物館の学芸員の女性は、戦後北方領土や千島列島、樺太の南半分は「ソ連（現ロシア）に引き渡された」と説明していましたが、事実は終戦後の侵攻によって違法に占拠されたことに他なりません。反論はしませんでした。明らかに間違った解釈です。訪問団の一人が「ロシア人はソ連が日ソ中立条約を破って侵攻してきた事が抜け落ちている」と言っていました。まさにその通りだと思います。日本とソ連は戦争をしていなかったのに、終戦直前（満州や朝鮮）または終戦後（樺太南半分、千島列島、北方領土）に日ソ中立条約を破って侵攻してきて北方領土まで不法に占拠したという事実は消すことができません。遺骨収集が進められているという話もありましたが、千島列島の一番北にある占守島（しゅむしゅとう）でのことを言っているのだと思いました。終戦後ソ連軍が上陸侵攻して来たため、日本軍が激しく反撃し、ソ連軍を追い落としつつあったようですが、大本營の命令により、日本軍は反撃を止めました。ソ連軍の死者が日本軍の倍近く出たようです。ソ連が侵攻してきたことで双方に多くの戦死者が出ました。占守島では戦死した日本兵の遺骨もほとんど収集されていないと思いますが、学芸員の女性は戦死した日本兵の遺骨も収集していると言っていました。私も2・3年前に占守島で見つかった日本兵の遺骨の身元が認識票からわかり、返還されたというニュースを見ました。しかしまだ多くの戦没日本兵の遺骨がそのままになっていると思います。



ホームビジット、オリシェフスカヤさんと



古釜布郊外日本人墓地



宿泊先の友好の家から古釜布湾の一部を臨む 友好の家の近くの公園より古釜布湾の一部



墓参の前に訪れたろうそく岩 ろうそく岩の近くの断崖 砂浜に牛を放し飼いに
以前、きれいな花が咲き乱れる野原に錆びた日本軍の戦車が放置されている写真を見た
ことがあります。確か占守島の写真だったかと思います。それも激戦の跡を伝えるものだと
思います。

こども園（保育園と幼稚園を一緒にした施設）、スポーツ健康施設（トレーニングジム、
体育館、屋内温水プールなどが併設されていました）、ロシア正教会、商店、文化会館、図
書館、古釜布学校も見学しました。若い夫婦や子供も多く、朝こども園へ子供を歩いて送
って行く途中と思われる若い母親や子供連れの夫婦も多く見かけました。古釜布学校は 1
年から 11 年まで（日本の小学校 1 年から高校 2 年にあたる）の生徒 700 人が通う大きな学
校でした。いろいろなクラスを授業中に訪問し、生徒の様子を見せていただきました。ど
かどかと授業中に押しかけて迷惑だったと思います。1 クラス 15 人ほどでゆったりした空
間で落ち着いて授業を受けていました。充実した教育が行われていると感じました。「教育
は国家百年の計」と言われますが、教育が充実しているということは、生活基盤や考え方
が安定してきてくる証拠なのだと思います。11 年生が終わると試験を受けて大学や専門
学校へ進学するとのことでした。国後島には大学や専門学校がないので、樺太（サハリン）、
ウラジオストクやモスクワなどの学校へ行くそうです。就職も含めて若者が島を離れる傾

向があるそうです。しかし、教育文化施設も充実し、若い定住者も多く、着実に故郷としてのロシア化が進んでいることがうかがわれました。商店は一カ所に固まって何軒かありましたが、大きなスーパーはなく、個人商店で食料品を中心に売っていました。魚の燻製や冷凍した大きな固まりの牛肉や豚肉、日本製ではないカップ麺（どこ製かはよくわかりませんでした）もたくさんありました。野菜やブドウやトマトも売っていましたが、あまり新鮮ではなさそうでした。ホームビジットで訪れたオリシェフスカヤさんの家の夕食でもキュウリやトマトが出されていましたが、（友好の家の食事では必ず野菜としてキュウリとトマトが出されました）「サハリンからのもの」と言っていました。豊かな家庭には家庭菜園もあるようですが、国後島には売るための農産物を作っているような畑は無いようでした。

住民交流会や体育館での古釜布学校の生徒たちとのレクリエーションやゲームに熱中する姿を見て、「どこの国の子供も同じなんだ」と思いました。また、住民の多くは島での生活にほぼ満足している事が感じられました。走っている自動車は 90%以上が日本車それも 10 年ほど前のモデルが多かったです。もちろん日本の新車と思われる車に乗っている人もいましたが。住民との交流会で聞いてみると、日本が樺太やウラジオストクへ中古車を多く輸出していて、国後島の人達はそこから買ってくるのだと話していました。自動車は右側通行なのですが、右ハンドルの日本車に乗っているわけです。

住民交流会で国後島の生活の良い点と良くない点（これから改善してほしい点）を聞きました。以下に挙げます。

良い点

・島の主な産業は漁業 ・故郷であり、自然が豊かで人が優しい ・空港ができて物の輸送や交通が便利になった ・政府が 2 隻のフェリーを建造していて、他の島やサハリンや大陸との行き来が楽になりそう ・住宅不足も解消してきている

良くない点

・専門職（医師や教師、弁護士などと思われる）が少ない ・上下水道の不備（友好の家の水道水は飲まないように言われました。一般家庭も同じだと思います。一応水洗トイレなのですが、詰まる恐れがあるので、トイレトペーパーは流さないように言われました。友好の家の下水は地下浸透式のようです。島には下水道の処理施設はないようです） ・ゴミ処理の問題

（ろうそく岩を訪れた道すがら、産業廃棄物などのゴミが山積みされている所がありました。ゴミの焼却施設は無いようです。リサイクルも徹底されていないようです。



商店で売られていた燻製の魚



商店で売られていた日本製のインスタントコーヒー



ロシア語の授業風景

国後島訪問から帰って数日後、NHKのニュースで「北方領土での日露協同経済協力のために外務省、経産省、根室市などの担当者が国後島のゴミ処理の現状を把握するために古釜布を訪れた。国後島ではペットボトル以外のゴミは分別せず、埋め立てているので、ゴミ焼却施設やリサイクルセンターを造る計画である。」と聞きました。これは国後島の住民の希望に叶うことであり、何よりも貴重な国後島の自然環境を守ることにつながることだと思いました。ぜひ、進めてほしいです。国後島の現状を見たり、ほんの少しですが住民との交流から、住民達は日本人と同じ善良なごく普通の人達であると感じました。しかし、歴史的にも道義的にも改めて北方領土は日本の領土であり、これからも返還を求め続ける必要性を痛感しました。同行した外務省の方とも話したのですが、この要求は国際社会の中の1つの国である日本の譲れない主張なのだと思います。外務省が述べているように、主権を日本に移し、ロシアの住民の希望者は今まで通り住み続けてもらえば良いのだと思います。かつてのソ連が行った事を日本はすべきではありません。辛抱強くロシアと交渉していくことが大切だと思います。最後に、得がたい貴重な体験をさせていただいた北対協の皆様をはじめ全ての関係者の皆様に心からのお礼を申し上げます。

技術の授業で作成したロボットの实演



爺爺岳遠望（建物の屋根の上）



日露の子供達の交流後の集合写真